

□ 統括的展望

寺西基之

サントリーホール休館の影響

2017年の音楽界について、1月から夏までは例年に比べて目立ったものがあまり多くなかったといえるだろう。特に前年秋の名門オーケストラを中心とした来日ラッシュから一転、外来の大物アーティスト、特にオーケストラの来日が上半期には例年より少なかったことは指摘できよう。いくつかの大手の招聘元が口を揃えて言っているように、サントリーホールが2月から8月まで改修工事のために休館したことが大きかったようだ。実際、9月にサントリーホールがリニューアル・オープンして以後は、反動のように来日ラッシュが復活し、特に11月は名門オケが次々と来日して、音楽界を賑わせた。

サントリーホールの休館は、特にここで定期を開催している在京オケに深刻な影響をもたらした。多くのオケは他のホールでの開催に切り替えたが、この期間のサントリーの定期シリーズを休止した楽団もあれば、日本フィルのように毎回異なるホールでの開催を余儀なくされた楽団もあった。サントリーホールが使えないことが外国からの招聘や国内オケの動向に大きな影響をもたらしたことは、いかにサントリーホールが日本の演奏界の中心的存在になっているかを示していると思われる。

「アッジの聖フランチェスコ」「スカルダネッリ・ツィクルス」など

そうした中でも2017年は画期的な公演がいくつもあった。特に大きな話題となったのが、読売日本交響楽団によるメシアンのおペラ「アッジの聖フランチェスコ」全曲の日本初演（演奏会形式）である。大編成の難曲ゆえにこれまで日本では全曲演奏がなされていなかったこの大作を、作品を知り尽くしたシルヴァン・カンブルランの指揮のもと、理想的なキャストを得て、きわめて高水準の演奏で本邦初演できたことは、わが国の楽壇史上のひとつの偉業だったといえる。練習を一か月前から始めるなど、楽団がこの作品を取り上げる意義を十分に認識して、周到な計画のもとにことを運んだ点も特記すべきだろう。読響はそれに先立ってやはりカンブルランの指揮でメシアンの大作「彼方の閃光」も取り上げるなど、2017年はとりわけ読響の存在感が際立った一年となった。

注目すべきはこの「アッジ」の2回の東京公演も「彼方の閃光」もチケットが完売したことである。もちろんカンブルランと読響への期待もあっただろうが、現代作品は売れないというこれまでの傾向は必ずしも当てはまらなくなっている。東京オペラシティが開催したスティーヴ・ライヒ80歳を記念した「テヒリウム」を中心とした演奏会は、同一内容の公演が2回とも完売となり、ライヒ人気を印象付けた。

同じ東京オペラシティで開催されたホリガールの大作「スカルダネッリ・ツィクルス」の日本初演も画期的で、ハインツ・ホリガール自身の指揮とラトヴィア放送合唱団&アンサンブル・ノマドによって紡がれたデリケート極まりない響きの世界に聴衆が釘付けとなった。サントリー芸術財団のサマーフェスティバルで、最近りバイバルの動きがある戦前の作曲家・大澤壽人の

コントラバス協奏曲と交響曲第1番が山田和樹指揮日本フィルによって世界初演されたことも特筆されよう。井上道義&大阪フィルによるバーンスタインの「ミサ」もチャレンジングな企画だった。

オペラの話

オペラの分野でも話題の多い一年だった。イタリアの名ソプラノ、マリエッタ・デヴィーアの日本での最後のオペラ出演として催された藤原歌劇団の「ノルマ」は、ベテランならではの多様な表現力に満ちた彼女の味のある歌唱が、この作品の真価を明らかにした。グラインドボーン音楽祭との提携公演である東京二期会の「ばらの騎士」は、リチャード・ジョーンズの独自の視点からの演出とセバステイアン・ヴァイグレ指揮読響の充実した演奏に歌手陣の健闘が結び付いた質の高い公演となった。日生劇場の「ルサルカ」、いずみホールの「愛の妙薬」など劇場やホールの制作によるオペラにも注目すべきものがあり、全国5都市（新潟、東京、金沢、魚津、沖縄）の劇場の共同制作による「トスカ」は、映画監督の河瀬直美が初めてオペラ演出に挑戦し、その斬新なアイデアが賛否両論を呼んだ。

新国立劇場は芸術監督の飯守泰次郎の指揮、故ゲッツ・フリードリヒ演出によるヴァーグナー『ニーベルングの指環』ツィクルスの締めくくりとして、「ジークフリート」と「神々の黄昏」の2作を上演、劇場開館20年を飾った。またびわ湖ホールでは沼尻竜典芸術監督の指揮、ドイツの大御所ミヒャエル・ハンベの演出による4年がかりの『指環』ツィクルスがスタート、その第1作として「ラインの黄金」が上演され、プロジェクション・マッピングを駆使したきわめて具象的なハンベの舞台づくりが大きな話題となり、チケットも完売という盛況ぶりを示している。「ラインの黄金」は日本フィル定期でもインキネンの指揮で取り上げられ、演奏会形式ながら照明を効果的に用いるなど、情景が浮かぶような工夫がなされ、演奏も高水準のものとなった。同様に、マルク・ミンコフスキ指揮アンサンブル金沢の「セビリアの理髪師」、パーヴォ・ヤルヴィ指揮NHK交響楽団とジョナサン・ノット指揮東京交響楽団の競演となった「ドン・ジョヴァンニ」など、いずれも演奏会形式と謳った公演ながら、演技や照明でもって実際の舞台上演に匹敵するような、巧みに情景を視覚化した充実した公演に結実していた。一方で東京フィルは首席指揮者アンドレア・パッティストーニの指揮で「オテロ」を演奏会形式で取り上げたが、演奏に対する高い評価の一方で、ライゾマティクスリサーチによる映像演出が音楽にそぐわないという批判もあった。しかしそれも含めて、様々な上演方法の試みがオペラの楽しみ方に多様な広がりを与えていることも事実だろう。

外来の本格的なオペラ引越し公演では、やはりバイエルン州立歌劇場の来日が筆頭に挙げられよう。特に「タンホイザー」はロメオ・カステルッチの刺激的な演出とともに、初来日のキリル・ペトレンコのすばらしい音楽作りが話題となった。

オーケストラの動向 — 多かった初目見えの外来指揮者&オケ

そのペトレンコはバイエルン州立歌劇場管弦楽団とともに、マーラーの交響曲第5番などオーケストラ公演も振ったが、なるほどベルリン・フィルの次期音楽監督に選ばれたことが納得できる恐るべき実力を披露した。日本では幻の指揮者ともいわれた彼がついにヴェールを脱いだといえよう。やはりこれまで日本に来ていなかったウラディーミル・ユロフスキも手兵のロンドン・フィルと初来日、その才腕ぶりを明らかにした。

指揮者個人としてはすでに来日しているが、ポストを持つオケとは初お目見えというコンビも多く、クシシュトフ・ウルバンスキ&NDRエルブ・フィル、レナード・スラトキン&デトロイト交響楽団、ダニエレ・ガッティ&ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団、アンドリス・ネルソンス&ボストン交響楽団、フィリップ・ジョルダン&ウィーン交響楽団などがそれぞれに充実した演奏を聴かせた。またサントゥ＝マティアス・ロウヴァーリ&タンペレ・フィル、クリスチャン・リンドバーク&ノルウェー・アーケティック・フィルといった北欧からのオケの来日が相次いだことも注目される。こうした初お目見えの一方で、サイモン・ラトル&ベルリン・フィルはコンビとしては最後の来日公演となった。エサ・ベッカ・サロネン&フィルハーモニア管弦楽団、ヘルベルト・ブロムシュテット指揮ゲヴァントハウス管弦楽団などのお馴染みのコンビも名演を残していた。

国内のオケの充実ぶりも目を見張るものがあった。すでに触れた読響をはじめ、どの楽団も、個々には財政などいろいろ問題を抱えつつも、それぞれに特色を打ち出そうと努力している。2017年にシェフの異動があったのは広島交響楽団で、4月に新たに下野竜也が音楽総監督に就任、初年度から早くもプログラミングなどに下野色を鮮明に打ち出して、新しい時代をスタートさせたことを印象付けた。一方、札幌交響楽団の名譽指揮者で、札幌のみならず日本の多くの楽団に客演してきたラドミル・エリシュカが、健康上の理由により、2017年秋の公演を最後に今後来日はしないことが発表された。日本の音楽界に大きな功績を残しただけに残念だ。水戸室内管弦楽団は第100回定期を小澤征爾指揮のベートーヴェンの「第九」（ただし第1、2楽章はラデク・バボラークが指揮）で飾り、セイジ・オザワ松本フェスティバルでは小澤と内田光子の共演が再び実現するとともに、ここのところ同音楽祭に毎年のように登場しているファビオ・ルイージがマーラーの交響曲第9番で名演を残した。紀尾井シンフォニエッタ東京は紀尾井ホール室内管弦楽団と改称し、ライナー・ホーネックを首席指揮者に迎えて新たな道を歩み始めている。古楽オケでは鈴木雅明&バッハ・コレギウム・ジャパン（BCJ）がベートーヴェンの「ミサ・ソレムニス」に初挑戦し、圧倒的な名演を残したことが特筆されよう。

モンテヴェルディ・イヤー

鈴木雅明&BCJはほかにもモンテヴェルディの生誕450年に因んで「聖母マリアの夕べの祈り」を取り上げ、感動的な演奏を聴かせた。鈴木優人もやはりBCJを率いてモンテヴェルディのオペラ「ポッペアの戴冠」を演出付きの演奏会形式で上演、的確なアプローチと適材適所の歌手陣の優れた歌唱と演技が結び付いた見事な成果を示している。濱田芳通&アントネッロも「聖母マリアの夕べの祈り」（ラ・フォンテヴェルデとの共演）と「ポッペアの戴冠」（演出とネローネ役は彌勒忠史）を取り上げ、外来ではラ・ヴェネチアーナも「ポッペアの戴冠」を上演した。このように「ポッペアの戴冠」の競演のような状況が生じたのもアニバーサリー・イヤーだからだろうが、せつかくの記念の年だったので「オルフェオ」や「ウリッセの帰還」に挑戦する団体があってもよかったと思われる。

ソリストたち

例年通り枚挙に暇がないほどのアーティストが来日し、日本人演奏家のリサイタルや室内楽も数限りないので、ここで詳しく触れる余裕はないが、いつもの年と比べると年の前半がやや大物が少なかったのはやはりサントリーホール休館の影響だろ

うか。そんな中で、ピアノのアンダーシュ・シフは大作家たちの最後のソナタをなんと休憩なしでほぼ2時間近く続けて演奏するプログラムを組み、きわめて緊張に満ちた時空間を作り上げたのが印象的だった。93歳のピアニスト・メナヘム・プレスラーが奏でた達観した味わい深い音世界も忘れがたい。一方でセンスに満ちた「ゴルトベルク変奏曲」を聴かせてくれたベアトリーチェ・ラナなど、新進気鋭の名手との出会いも多かった。

日本人アーティストではピアニストの小山実稚恵が12年にわたる壮大なリサイタル・プロジェクト「小山実稚恵の世界」を完結させ、有終の美を飾った。彼女は前年度の芸術選奨文部科学大臣賞受賞に続いて、2017年度には紫綬褒章を受章している。大御所チェリストの堤剛の活躍もめざましく、難技巧のチェロのみならずチェリストに打楽器の演奏も求めたグバイドウーナの「太陽の讃歌」や、一柳慧の新作「ヴァイオリンとチェロの二重協奏曲」の初演など、その意欲のかつ挑戦的な活動ぶりはまったく齢を感じさせないものがある。一方、スイスのクララ・ハスキル国際ピアノコンクールでは若い藤田真央が優勝、新しくチェロ部門が創設されたベルギーのエリザベト王妃国際コンクールでは岡本侑也が第2位に輝くなど、日本の若手アーティストの健闘も目立った一年となった。

その他のトピックス

2017年は日本の楽壇に大きく関わった大指揮者が相次いで世を去った。2007年から2010年まで読響の常任指揮者を務めて多くの名演を聴かせたスタニスラフ・スクロヴァチェフスキが93歳で死去、2017年も読響に客演が予定されていただけに残念だ。また藤原歌劇団に何度も客演してロッシーニをはじめとするイタリア・オペラの真髄を教え込み、日本人の指揮者や歌手の教え子も多いアルベルト・ゼッダも他界した。2016年12月に彼の米寿を祝うコンサートが日本で開催され、精悍な指揮ぶりを披露してからわずか3カ月後のことだった。また日本フィルやNHK交響楽団と深い関係にあったイルジー・ピエロフラーヴェクも71歳で没している。

日本音楽著作権協会（JASRAC）が音楽教室から著作権料を徴収する方針を打ち出したことは、音楽業界に大きな波紋を呼んだ。反発した音楽教室側はJASRACを相手取って訴訟を起こし、教室において教える目的で楽曲を聴かせることが著作権法の定める演奏権に当たるかどうかの解釈を争っている。作曲家の権利を守ることは当然であるが、教育の現場にまで徴収の強化が及ぶと現代の楽曲を学ばせることに教育者も消極的になって、結果的に作曲者の利益を損ねるにもなりかねないだろう。JASRACの本来の使命である音楽文化の発展という目的に照らして果たしてこうした徴収強化がそれに適ったものなのかどうか、司法には的確な判断が望まれる。